【一般部門】大賞

『次のおしごと』

作 ： 竹田まどか　選考と作画:ヒロミチイト

ストーリー

勤続 30 年をすぎ、職場異動となったゆり子さん。送別会の帰り、クリスマスのイルミネーションが輝く街を歩いていると、見知らぬ靴屋を見つける。クリスマスブーツが並ぶ店の店主はトナカイだった。ゆり子さんは特注のブーツをつくることに。不思議なつくり方のブーツはサンタクロースのブーツで、サンタの仕事をするのだと知らされる。

解　説

「メルヘンの世界」は非現実的でファンタジックです。自由な想像力で何にでもなれ、時空も超えられる世界です。そんな不思議な物語には、作者の望みや願いが込められています。

この物語の主人公ゆり子さんは、定年を間近にした職場異動がきっかけで、ふと立ち止まります。過去の仕事や若いころを振り返り、これからのことが少し不安になっています。
そんな時、トナカイが店主のサンタクロースの靴屋に遭遇。現実と非現実の境界「メルヘンの扉」がひらく瞬間です。トナカイとのやりとりをファンタジックに表わし、告げられた「サンタクロースのおしごと」が、ゆり子さんのセカンドライフを明るく照らします。

暮らしの中で、喜怒哀楽をともなうさまざまな出来事。「もっとこうだったら」「ああなっていれば」をメルヘン的な視点でとらえ、物語に紡いでいく。見えない世界を想像し、心で感じてイメージをひろげることで、他者への思いも深くなります。作者はこの物語で、ゆり子さんのセカンドライフへエールをおくっているのです。

受賞者プロフィール

竹田　まどか（たけだ　まどか）　〔東京都〕

「定年が自分に迫ってきたとき、かなしさと切なさと悔しさの感情が生まれました。一方で、自分を見つめ直すきっかけにもなりました。これから何ができるのか、いや、私は何がしたいのか、そう考えたとき物語が動き出しました。近所の小さな靴工房や路地裏で見つけた靴修理の店を題材に、長く勤めたごほうびにこんなお店との出会いがあってもいいと思って書きました。」
本賞の第 23 回入賞・第 24 回優秀賞・第 34 回優秀賞受賞。

【こども部門】大賞

『コテツ、生きる』

作 ： 上野 葉月　選考と作画：北見 葉胡

ストーリー

大好きな飼い主のばあちゃんが亡くなり、犬のコテツは生きる気力をなくす。ばあちゃんの娘のミヨに世話をされ、6 年が過ぎる。コテツは天国へ行く煙の中でばあちゃんと再会する。ばあちゃんと話すうち、コテツはミヨに一度も感謝しなかったことに気づく。そしてミヨの前にコテツによく似た子猫が現れる。コテツと名付けてミヨは飼うことにした。

解　説

飼い犬のコテツがクールな口調で語るお話です。作者はストーリーが暗くならないように、コテツの個性をユニークに表わしています。

飼い主のおばあさんのことが大好きな犬のコテツ。おばあさんが亡くなり、娘のミヨが世話を引き継ぎます。おばあさんを思い続けて心を閉ざすコテツは、ミヨになつくこともなく日々を過ごします。6 年が経ち、眠るように息を引きとるコテツ。天国につながる煙の中でおばあさんと再会して話すうち、コテツは「ミヨに一度もしっぽを振ったことがない」「感謝の気持ちを表わさなかった」と気づきます。ミヨのまなざしに気づけなかったコテツは、ある決意をします。そして玄関に現れる子猫。ミヨは子猫にコテツの面影を感じ、コテツと名付けて飼うことにします。

ラストで、ミヨの新しい家族となった“子猫のコテツ”がしっぽを振るしぐさに、ほっと笑顔になるお話です。

受賞者プロフィール

上野 葉月（うえの はづき）　〔東京都 11 才〕

「私にとってうちの犬はとても大事な存在で、日々楽しいことや笑いを沢山くれます。作品では犬と人間の気持ちを描いてみました。いろいろな登場人物の視点から、一つの物語を見てもらえるようにしました。大きな出来事がない中でも、あたたかいものを感じられる作品として読んでもらえたら嬉しいなと思います。物語はこれからも書き続けたいです。」

【一般部門】優秀賞

『日曜日のフリマで』

作：月日　みみ（つきひ　みみ）選考と作画：山田　ケンジ

プロフィール

〔大阪府〕

「京都に住んでいた時、近くの寺の境内で日曜日にフリーマーケットが催されていました。竹筒の音もその場で経験しました。様々な国の人々との交流、コミュニケーションが自然に育まれることを願って、お話を考えました。童話創作を通した自己表現は、自分を対象化できる喜びがあります。健康でよりよく生きる活動であると思っています。」

ストーリー

お寺の境内でフリマが開かれる日曜日。ありさのお父さんは、出品するアンパンを焼いていてありさも手伝う。フリマはにぎわい、ありさはパンを売る合間に、ほかの店を見て回る。民族調の装いのおばあさんの店で、長い竹の筒をわたされる。耳に当てると波の音がして、おばあさんの歌が聞こえてきた。竹筒の中にはあずきが入っていると知る。

【一般部門】優秀賞

『白い風見鶏』

作：久田　恵（ひさだ　めぐみ）選考と作画：横田　美砂緒

プロフィール

〔千葉県〕

「よく利用するバスの窓から風見鶏が見えていました。通るたびに同じ方向を向いているのが気になり、そこからこのお話が浮かびました。また双子の孫の交換ごっこを見て「風見鶏も別の物と交換したらどうなるか」と考えました。空想世界にひたりながら、童話創作にも挑戦してみたいと思いました。初めて書いた作品で受賞し、とても嬉しいです。」

ストーリー

仲間たちと小屋に住む一羽の白いニワトリ。庭から見える教会の風見鶏を見て、自分も自由になりたいと思っている。一方、屋根の風見鶏はひとりぼっちで、大勢で暮らすニワトリがうらやましい。小鳥が「魔法でニワトリとかわらせてあげる」という。入れかわった風見鶏とニワトリ。けれど、風見鶏になったニワトリは「自由に動けない」となげく。

【一般部門】優秀賞

『ぼく リングボーイ』

作：藤谷 クミコ（ふじたに くみこ）選考と作画：生駒 さちこ

プロフィール

〔兵庫県〕

「実際に 3 才の孫がリングボーイで指輪を落としたことが、このお話のきっかけです。それから何年も経ち、小学 3 年生の主人公像が浮かび、この度一気に書き上げました。「虫が好き」というのは、幼い頃の私自身が投影されています。結婚式という晴れの日に、客観的に見える家族の形を、虫好きの少年のハプニングを通して書きたいと思いました。」

ストーリー

小 3 の僕は写真家のおじさんの結婚式で、リングボーイを頼まれる。結婚式の日、指輪を運んでいた僕は転んでしまう。庭まで転がった指輪を追いかけ、気がつくと不思議な野原にいた。指輪をさがす僕を、ルリハムシやハンミョウが道案内してくれる。指輪を見つけて式場に戻る僕に、虫たちがついてくる。そして虫たちも一緒に結婚式の写真にうつる。